

十二、近現代

(1) 西洋の衝撃

- ・〔1〕 …アヘン戦争（一八四〇～四二年）から開始。西洋の帝国主義列強の侵略によって封建体制下の前近代中国が「半植民地半封建」の状態に陥ったとみなす歴史観に由来。
第一次：南京条約 第二次（アロー戦争）：北京条約

- 〔2〕 …外国語に通じた人材の育成、自然科学や社会科学の外国書の翻訳を行う。
『万国公法』：マーチンが同文館の学生たちの助けを借り、ホートン『国際法』を中国語に翻訳。
ヨーロッパにおける条約体制にもとづく国際秩序観を中国にはじめて紹介。

- ・二つの戦争を通じて、西洋の軍事力を痛感。

- ◎〔3〕 …曾國藩・李鴻章・左宗棠ら地方長官による近代化政策。

開港場―西洋語や西洋事情に通じた知識人や西洋との商取引を仲介する「買弁^{ばいべん}」が登場。

王韜^{おうたう}：宣教師と協力して、西学書を翻訳出版。中国語新聞『循環日報』を創刊。

中国の「変法」（改革）と「自強」を説く。

鄭観応^{ていかんおう}：国家の盛衰を左右するのは「兵戦」ではなく「商戦」（商業や通商による戦争）と主張。

- ・清末には、清朝考証学にかわって、諸子学、春秋公羊学が復興。諸子の学に再評価が下される。

- 〔4〕 の興起。内政の弛緩を支配体制の危機ととらえ、内政改革への強い志向をもつ。

- 〔5〕 …世界の地誌を紹介した『海国図志』を編纂。『四州志』（イギリス人マレー）『世界地理大全』の編訳）をもとに、さらに多くの世界地理の資料を集めて完成。西洋列強の軍事的威力を認めてそれに倣うことを説き、近代中国における西洋認識の出発点をなす。

(2) 儒教の再解釈と進化

- ・一八九四年、〔6〕 …。翌九五年、下関条約。欧米の列強による「領土分割」が急速に進み、「東夷」と蔑んでいた日本に対する軍事的な敗北は、中国知識人に大きな衝撃を与える。

↓洋務運動の失敗。「中体西用」の考えにもとづいた皮相な改革に終始したとの批判を引き起こす。

日本が勝ったのは、「改革」が成功したためであり、制度面で改革を求める「変法」論が急速に台頭。

- ◎〔7〕 …「変法」論の代表的な論客。朱次琦^{しゅじき}から漢学・宋学を学ぶが、廖平の著作を読み、今文公羊学に転向。今文経学は前漢時代以来二千年近く絶学状態であったが、一八世紀後半に復活。

『春秋董氏学』：今文経書『春秋公羊伝』を孔子の真意（「微言大義」）を伝えるものとする。

- 〔8〕 …漢の古文経書は、劉歆の偽作とする。

- 〔9〕 …孔子は周公の道の述者であるだけではなく、「古に託して制を改める」「作者」と見なす。↓改革者のイメージを孔子に賦与。

真の儒教は孔子を教祖とする〔10〕であり、その核心は〔11〕の理想社会を目指す三世進化説であるとした。公羊学の抛乱世・升平世・太平世の三世進化説と『礼記』礼運という小康・大同の世に発想を得て、独自の進化論を構想。

清末の中国ははすでに小康なので、孔子の理想に沿って大同社会の実現に前進すべきとする。

↓改革は西洋の模倣ではなく孔子の理念の実現であると主張。自由や平等など近代西洋社会を構成する諸価値すべてを孔子教に組み込んで中国固有の価値であることを主張し、改革の根拠とした。

- ・〔12〕 …

社会進化論者のスペンサーを厳しく批判したダーウィニストであるハクスリーの『進化と倫理』を翻訳したもの。厳復自身は進化によって自然から社会までを統合的に説明することを説くスペンサーの立場に立つ。中国における最初の「社会進化論」紹介であり、大きな反響を受ける。

- ・〔14〕 …下関条約を知った康有為は、弟子の梁啓超らとともに奮起。一八九八年に光緒帝から改革をまかされるが、西太后らに弾圧され、頓挫（百日維新）。康有為・梁啓超は日本に亡命。

(3) 東アジアにおける「知」の連鎖

- ・日清戦争での敗北↓日本は中国にとって改革のモデルとなり、変革を求める亡命知識人たちの居住地に。在日中国知識人の活動

- 〔15〕 …〔16〕 …（本格的な日本紹介の書）

その後、康有為は『日本変政考』や『日本書目志』を編纂、光緒帝に献上。

一九〇五年、科挙の廃止。中国の学生は、「新学」の必要性を痛感、日本への留学を考える。その頃、日本は近代的な学問や教育制度が整備されつつあり、西洋の最先端の学術を翻訳・紹介。

◎西洋近代の重要な学術概念や学問が日本というレンズ―^{〔17〕}」を通じて中国に輸入される。（日本で受容された西洋の学問という意味で、西洋から見て「東学」といわれる。）

◎^{〔18〕}「…中国近代随一のジャーナリスト。」^{〔19〕}」の著者。

一八九六年、『時務報』創刊。翌年、湖南時務学堂で教え、「民権」を説いたが、王先謙ら保守派から厳しい反発を買う。戊戌変法後、日本に亡命。その後、『清議報』『新民叢報』を相次いで創刊。

^{〔20〕}「を精力的に中国に紹介。『和文漢読法』『東籍月旦』『自由書』など。日本に紹介された西洋近代思想を吸収し、自らの思想にしていくな。」

「新民説」…「民族帝国主義」の時代における社会進化論的な世界にあつて「優勝」の列強に侵略され、「劣敗」の亡国の劣に連ならないために「民を新たに」し、「国民」意識を高めようとしたもの。

「新史学」…ナショナル・ヒストリーの観点から、中国の伝統学術を再構成しようとする。

（4）共和国の希求

◎^{〔21〕}「…革命派の指導者。三民主義（民族・民権・民生）を主張。」

『倫敦被難記』で世界的に名が知られる。一九〇五年、東京にて^{〔22〕}」を結成。

機関誌『民報』を発行、革命思想の宣伝に努める。「排満」（満洲族の排除）の種族革命を主張、専制の清朝政府を打倒する以外に共和制を実現し、中国社会を改革する方法はないとする。

これに対して梁啓超は、武力革命は暴動と外国帝国主義の干渉を招いて国を滅ぼすものであり、いまはむしろ開明専制（開明的な君主による専制）を行うべきだと主張。論戦は平行線をたどる。

・一九〇七年、同盟会内部の対立路線が起ころ。章炳麟や宋教仁は、反孫文の旗幟を鮮明にする。

^{〔23〕}「…愈樾のもとで文字学・史学を修め、「国学」に対する該博な知識で、在東京中国留学生の尊敬を集める。」

^{〔24〕}「を主張するグループの登場。東京、パリで活動。

政府大官暗殺など直接的行動によつて政府を打倒し、革命後に無政府共產の理想社会を実現することを目指す。革命派が主張する排満主義を復讐主義や偏狭な種族主義から救うとともに、反帝国主義も明確に打ち出す。また、徹底した人間平等論にも特色がある。

^{〔25〕}「…一九〇七年、社会主義講習会を東京で設立。日中の無政府主義者が交流。

◎^{〔26〕}「」

一九一一年、武昌蜂起。アメリカにいた孫文は、清朝打倒が実現したことを聞くとすぐさま帰国。

一九一二年、孫文を臨時大總統とする^{〔27〕} 中華民国 「が南京に成立（アジア最初の共和国）。

新政府を維持するため、宣統帝の退位を引き換えに袁世凱に總統の座を譲り、袁世凱の独裁が始まると日本に亡命。

（5）新文化運動とマルクス主義の受容

・一九一五年、^{〔28〕}「が『青年雑誌』を上海で創刊、^{〔29〕}」始まる。

伝統的な思想や家族制度を徹底的に批判し、中国文化の全面的な改革の必要性を主張。

新文化運動の要素―儒教批判、文学革命。

^{〔30〕}「…その時代にはその時代の文学がある。今日の生きた言葉（口語）を用いるべき。

↓文語を用いることで古の聖賢の権威に寄りかかり、個人的な感情・表現を失っている。

実践―^{〔31〕}「…「狂人日記」など。中国の伝統社会を独特の筆致で厳しく批判。

^{〔32〕}「…北京大学校長。陳独秀を北京大学に招く。「思想自由」「兼容併包」をスローガンに、新文化運動グループやそれ以外の人材も北京大学に集める。

・一九一九年、パリ講和会議。その結果に抗議して起こった五四運動が中国各地に広まる。

一九二二年、^{〔33〕}「結成（今日の中国の政權政党）。陳独秀は初代総書記に就任。

^{〔34〕}「―陳独秀とならぶ初期の中国共産党の指導者。早稲田大学に留学経験あり。

「私のマルクス主義観」（『新青年』に発表）

中国で最初に^{〔35〕}「理論を体系的に紹介。人々を革命に立ち上がらせる理論

としてのマルクス主義であり、経済的条件が成熟するまで社会主義はできないという宿命論ではない。

↓「主意主義」(ヴォランタリズム)的なマルクス主義理解。

理想社会を実現するのは、自覚した人間の主体的な行動によらねばならない。

↓「主観能動性」を主張する^{〔36〕} ーに通じる、中国共産主義運動の特徴の一つ。

・新文化運動で「全面的な西洋化」論の立場から徹底的に批判された儒教は、一九二〇年代に入るとそれほど批判されなくなる。第一次世界大戦で疲弊した「西洋の没落」が説かれるなかで東西文化論戦が起こり、伝統文化や旧教の再評価が浮上。

↓^{〔37〕} ー…梁漱溟^{りょうそうめい}「儒への回帰」、蒋介石「礼儀廉恥」。

一九四九年^{〔38〕} ー成立。それ以降も儒教は様々な形で取り上げられる。

一九五三年 毛沢東による梁漱溟批判。非民主的で自己批判の精神がないと罵る。

一九六六年^{〔39〕} ー…「四旧」(旧風俗・旧習慣・旧思想・旧文化)の打破の提唱。

一九七四年 「批林批孔」…林彪(毛沢東の後継者に指名された人物)と孔子を批判する。

↓孔子は奴隷制を擁護した反動的な思想家であると厳しく批判される。

文化大革命終結後、一九八〇年代に入ると^{〔40〕} ーを再顕彰する動きが出てくる。

「文化熱」という風潮の中で、多面的に中国の古代思想を含めた中国文明そのものが問い直される。

【復習のポイント】

☆春秋戦国時代～秦代 (思想家とその特徴を確認しておくこと)

① 儒家…孔子・孟子・荀子 ② 墨家…墨子 ③ 道家…老子・莊子 ④ 陰陽家…鄒衍

⑤ 名家…惠施・公孫龍子 ⑥ 兵家…孫子・呉子 ⑦ 法家…韓非子 ⑧ 雑家…呂不韋

・秦代…始皇帝の天下統一、焚書・思想統制。

☆漢代 (代表的な人物とその思想の特徴・学説・著作を覚えておくこと)

・前漢…儒教国教化、経書の確立↓「経学」。代表的な人物―劉安・董仲舒・司馬遷ら。

・後漢…緯書の出現、今古文論争と経学の総合化。批判精神と実証主義。代表的な人物―鄭玄・王充ら。

▼魏晋南北朝～隋唐

・老莊思想の流行。三玄(『易』『老子』『莊子』)を対象とした学問「玄学」の隆盛。竹林の七賢の登場。

・『五經正義』(公式の統一解釈)の成立、古文運動。

・儒教・仏教・道教三教の鼎立。

※漢代～唐代…「訓詁学」(字句の意味の解釈に重点を置く)

☆宋代 (朱子学を中心に、宋代の思想・学問の特徴を覚えておくこと)

・北宋 「行動する儒者」…実践の重視。王安石、司馬光ら。

「思索する儒者」…聖人の「道」を究明し、体得する。↓「道学」

「北宋五子」(周敦頤・程顥・程頤・張載・邵雍)による儒教の復興。

・南宋 朱熹―朱子学…『四書集注』『修己治人』、理氣二元論、性即理、白鹿洞書院など。

陸九淵―陸学(心学)…程顥の「万物一体の仁」を受け継ぐ、心即理。

▼元代 朱子学の継承した許衡と、朱子学・陸学を折衷した呉澄の活躍。

▼明代 王守仁(王陽明)―陽明学…心即理、「知行合一」説、「致良知」。陽明学左派(李贄)。

※宋代～明代…「義理学」(宇宙の本体や人間の本質という哲学的問題に解答)

▼清代

・「清朝考証学」…漢代の注釈を復原。顧炎武・黄宗羲・戴震・阮元ら。

▼近現代

・西洋列強の衝撃、洋務運動、変法の思想の展開。康有為・梁啓超・孫文・陳独秀・毛沢東ら。

・「東学」…西洋近代の重要な学術概念や学問が日本というレンズを通じて中国に輸入。

・辛亥革命と中華民国成立、中国共産党結成、中華人民共和国成立、文化大革命、儒教・孔子の再顕彰。